

玉鬘

渋谷栄一訳

第一章 玉鬘の物語 筑紫流離の物語

「第一段 源氏と右近、夕顔を回想」

年月がたつてしまつたが、諦めてもなお諦めきれなかつた夕顔を、少しもお忘れにならず、人それぞれの性格を、次々に御覧になつて来たのにつけても、もし生きていたならば」と、悲しく残念にばかりお思い出しになる。

右近は、物の数にも入らないが、やはり、その形見と御覧になつて、お目を掛けていらつしやるので、古參の女房の一人として長くお仕えしていた。須磨へのご退去の折に、対の上に女房たちを皆お仕え申させなかつたとき以来、あちらでお仕えしている。氣立てのよく控え目な女房だと、女君もお思いになつていたが、心の底では、

「亡くなつた主人が生きていられたならば、明石の御方くらいのご寵愛に負けはしなかつたろうに。それほど深く愛していられなかつた女性でさえ、お見捨てにならず、めんどうを見られるお心の変わらないお方だったので、まして、身分の高い人たちと同列とはならないが、この度のご入居者の数のうちには加わつていたであろうに」と思つと、悲しんでも悲しみきれない思いであつた。

あの西の京に残つていた若君の行方をすら知らず、ひたすら世をはばかり、又「今更いつても始まらないことだから、しゃべつてうっかり私の名を世間に漏らすな」と、口止めなされたことに遠慮申して、安否をお尋ね申さずにいたうちに、若君の乳母の夫が、大宰少式になつて、赴任したので、下つてしまつた。あの若君が四歳になる年に、筑紫へは行つたのであつた。

「第二段 玉鬘一行、筑紫へ下向」

母君のお行方を知りたいと思つて、いろいろの神仏に願掛け申して、夜昼となく泣き恋い焦がれて、心当たりの所々をお探し申したが、結局お訪ね当てることができない。

「それではどうしようもない。せめて若君だけでも、母君のお形見としてお世話申しそう。鄙の道にお連れ申して、遠い道中をおいでになることもおいたわしいこと。やはり、父君にそれとなくお話し申し上げよう」

と思つたが、適当なつてもないうちに、

「母君のいられる所も知らないで、お訪ねになられたら、どのようにお返事申し上げられようか」

「まだ、十分に見慣れていられないのに、幼い姫君をお手許にお引き取り申すされるのも、やはり不安でしょう」

「お知りになりながら、またやはり、筑紫へ連れて下つてよいとは、お許しになるはずもありますまい」

などと、お互いに相談し合つて、とてもかわいらしく、今から既に氣品があつてお美しいご器量を、格別の設備もない舟に乗せて漕ぎ出す時は、とても哀れに思われた。

子供心にも、母君のことを忘れず、時々、

「母君様の所へ行くの」

とお尋ねになるにつけて、涙の止まる時がなく、娘たちも思い焦がれているが、「舟路に不吉だ」と、泣く一方では制すのであつた。

美しい場所をあちこち見ながら、

「氣の若い方でいらしたが、こつした道中をお見せ申し上げたかつたですね」「いいえ、いらつしやいましたら、私たちは下ることもなかつたでしょうに」

と、都の方ばかり思いやられて、寄せては返す波も羨ましく、かつ心細く思つている時に、舟子たちが荒々しい声で、

「物悲しくも、こんな遠くまで来てしまつたよ」

と謡うのを聞くと、とたんに二人とも向き合つて泣いたのであつた。

「舟人も誰を恋い慕つてか大島の浦に、悲しい声が聞こえます」

「来た方角もこれから進む方角も分からない沖に出て ああどちらを向いて女君を恋い求めたらよいのでしょうか」

遠く都を離れて、それぞれに気慰めに詠むのであった。

金の岬を過ぎて、「我は忘れず」などと、明けても暮れても口ぐせになって、あちらに到着してからは、まして遠くに来てしまったことを思いやうて、恋い慕い泣いては、この姫君を大切にお世話申して、明かし暮らしている。

夢などに、「ごく稀に現れなされる時などもある。同じ姿をした女などが、一緒に見えになるので、その後に気分が悪く具合悪くなったりなどしたので、

「やはり、亡くなられたのだらう」

と諦める気持ちになるのも、とても悲しい思いである。

「第三段 乳母の夫の遺言」

少式は、任期が終わって上京などするのに、遠い旅路である上に、格別の財力もない人では、ぐずぐずしたまま思い切つて旅立ちしないであろうちに、重い病に罹つて、死にそんな気持ちでいた時にも、姫君が十歳ほどにおなりになった様子が、不吉なまでに美しいのを拝見して、

「自分までがお見捨て申しては、どんなに落ちぶれなさるうか。辺鄙な田舎で成長なさるのも、恐れ多いことと存じているが、早く都にお連れ申して、しかるべき方にもお知らせ申し上げて、「運勢にお任せ申し上げるにも、都は広い所だから、とても安心であろうと、準備していたが、自分はこの地で果ててしまいそうなことだ」

と、心配している。男の子が三人いるので、

「ただこの姫君を、都へお連れ申し上げることだけを考えなさい。私の供養など、考えなくてもよい」

と遺言していたのであった。

どなたのお子であるとは、館の人たちにも知らせず、ひたすら、孫で大切にしなければならぬ子だ」とだけ言いつくろつていたので、誰にも見せないで、大切にお世話申しているうちに、急に亡くなってしまったので、悲しく心細くて、ひたすら都へ出立しようとしたが、亡くなった

少式と仲が悪かつた国の人々が多くいて、何やかやと、恐ろしく気遅れしていて、不本意にも年を越しているうちに、この君は、成人して立派になられていくにつれて、母君よりも勝れて美しく、父大臣のお血筋まで引いているためであるか、上品でかわいらしげである。気立てもおつとりとしていて申し分なくいらつしやる。

「第四段 玉鬘への求婚」

聞きつけ聞きつけては、好色な田舎の男どもが、懸想をして手紙をよくしたがる者が、多くいた。滅相もない身のほど知らずなと思われるので、誰も相手にならない。

「顔かたちなどは、まあ十人並と言えましようが、ひどく不具なところがありますので、結婚させないで尼にして、私の生きているうちは面倒をみよう」と言い触らしていたので、

「亡くなった少式殿の孫は、不具なところがあるそうだ」

「惜しいことだわい」

と、人々が言っているらしいのを聞くのも忌まわしく、

「どのようにして、都にお連れ申して、父大臣にお知らせ申そう。幼い時分を、とてもかわいいとお思い申していられたから、いくら何でもいいかげんにお見捨て申されることはあるまい」

などと言つて嘆くとき、仏神に願かけ申して祈るのであった。

娘たちも息子たちも、場所相應の縁も生じて住み着いてしまつていた。心の中でこそ急いでいたが、都のことはますます遠ざかるように隔たつていく。分別がおつきになつていくにつれて、わが身の運命をとて不幸せにお思ひになつて、年三の精進などをなさる。二十歳ほどになつていかれるにつれて、すっかり美しく成人されて、たいそうもつたいない美人である。姫君の住んでいる所は、肥前の国と言つた。その周辺で少しばかり風流な人は、まずこの少式の孫娘の様子を聞き伝えて、断られても断られても、なおも絶えずやつて来る者がいるのは、とても大変なもので、うるさいほどである。

「第一段 大夫の監の求婚」

大夫の監といって、肥後の国に一族が広くいて、その地方では名声があつて、勢い盛んな武士がいた。恐ろしい無骨者だがわずかに好色な心が混じつていて、美しい女性をたくさん集めて妻にしようと思つていた。この姫君の噂を聞きつけて、

「ひどい不具なところがあつても、私は大目に見て妻にしたい」

と、熱心に言い寄つて来たが、とても恐ろしく思つて、

「どつかして、このよつなお話には耳をかさないで、尼になつてしまおうとするの」

と、言わたところだが、ますます気が気でなくなつて、強引にこの国まで国境を越えてやつて来た。

この男の子たちを呼び寄せて、相談をもちかけて言うことには、

「思い通りに結婚出来たら、同盟を結んで互いに力になろうよ」

などと持ちかけると、二人はなびいてしまった。

「最初のうちは、不釣り合いかわいそうだと思ひ申していましたが、我々それぞれが後ろ楯と頼りにするには、とても頼りがいのある人物です。この人に悪く睨まれては、この国近辺では暮らして行けるものではないでしょう」

「高貴なお血筋の方といつても、親に子として扱つていただけず、また世間でも認めてもらえなければ、何の意味がありませんよ。この人がこんな熱心に「求婚申していただけるのこそ、今ではお幸せというものでしょう」

「そのような前世からの縁があつて、このような田舎までいらつしやつたのだらう。逃げ隠れなさうとも、何のたいしたことがありませんよ」

「負けん気を起して、怒り出したら、とんでもないことをしかねません」

と脅し文句を言うので、とてもひどい話だ」と聞いて、子供たちの中で長兄である豊後介は、

「やはり、とても不都合な、口惜しいことだ。故少式殿が「遺言」されていたこともある。あれこれと手段を講じて、都へお上らせ申さう」

と云う。娘たちも悲嘆に泣き暮れて、

「母君が何とも言いようのない状態でどこかへ行つてしまわれて、その行方をすら知らないかわりに、人並に結婚させてお世話申さうと思つていたのに」

「そのような田舎者の男と一緒にならうとは」

と云つて嘆いているのも知らないで、自分は大変に偉い人物と言われている身だ」と思つて、懸想文などを書いてよこす。筆跡などは小奇麗に書いて、唐の色紙で香ばしい香を何度も何度も焚きしめた紙に、上手に書いたと思つている言葉が、いかにも田舎訛がまる出しなのであつた。自分自身でも、この次男を仲間引き入れて、連れ立つてやつて来た。

「第二段 大夫の監の訪問」

三十歳ぐらいの男で、背丈は高く堂々と太つていて、見苦しくないが、田舎者と思つて見るせいか嫌らしい感じで、荒々しい動作などが、見えるのも忌まわしく思われる。色つやも元氣もよく、声はひどくがらがら声でしゃべり続けている。懸想人は夜の暗闇に隠れて来てこそ、夜這いとは言つが、ずいぶんと変わった春の夕暮である。秋の季節ではないが、おかしな懸想人の来訪と見える。

機嫌を損ねまいとして、祖母殿が応対する。

「故少式殿がとても風雅の嗜み深く立派な方でいらしたので、是非とも親しくお付き合ひいただきたいと存じておりましたが、そうした気持ちもお見せ申さないうちに、たいそうお氣の毒なことに、亡くなられてしまったが、その代わりにひたむきにお仕え致さうと、氣を奮い立てて、今日はまことに「無礼ながら、あえて参つたのです」

こちらにいらつしやるという姫君、格別高貴な血筋のお方と承つておりますので、とてももつたないことでございます。ただ、私めのご主君とお思ひ申し上げて、頭上高く崇め奉りましようぞ。祖母殿がお氣が進まないうでいられるのは、良くない妻妾たちを大勢かかえていますのをお聞きになつて嫌がられるのでございませう。しかしながら、そんなやつらを、同じように扱いますか。わが姫君をば、後の地位にもお劣り申させない

所存でありますものを」

などと、とても良い話のように言い続ける。

「いえどう致しまして。このようにおっしゃって戴きますのを、とても幸せなことと存じますが、薄幸の人なのでございましょうか、遠慮致した方が良いことがございまして、どうして人様の妻にさせて頂くことができません」と、人知れず嘆いていますようなので、気の毒にと思ってお世話申し上げるにも困り果てているのでございます」

と言う。

「またつく、そのようなことなどご遠慮なさいますな。万が一、目が潰れ、足が折れていらしても、私めが直して差し上げましょう。国中の仏神は、皆自分の言いなりになっているのだ」

などと、大きなことを言っていた。

「何日の時に」と日取りを決めて言うので、今月は春の末の月である「などと、田舎めいたことを口実に言い逃れる。

「第三段 大夫の監、和歌を詠み贈る」

降りて行く際に、和歌を詠みたく思ったので、だいぶ長いこと思いめぐらして、

「姫君のお心に万が一違ふようなことがあつたら、どのような罰も受けましよう」と 松浦に鎮座まします鏡の神に掛けて誓います この和歌は、上手にお詠み申すことができたと我ながら存じます」

と言うて、微笑んでいるのも、不慣れで幼稚な歌であるよ。気が気ではなく、返歌をするどころではなく、娘たちに詠ませたが、

「私は、さらに何することもできません」

と言うてじつとしていたので、とても時間が長くなってはと困つて、思いつくまゝに、

「長年祈つてきましたことと違つたならば 鏡の神を薄情な神様だと思ひ申しましよう」

と震え声で詠み返したのを、

「待てよ。それはどういふ意味なのでしょうが」

と、不意に近寄つて来た様子に、怖くなって、乳母殿は、血の気を失つた。娘たちは、さすがに、気丈に笑つて、

「姫君が、普通でない身体でいらっしゃるのを、せつかくのお気持ちに背きましたらなら、悔いることになりましようものを、やはり、毫碌した人のことですから、神のお名前まで出して、うまくお答え申し上げ損ねられたのでしよう」

と説明して上げる。

「おお、そうか、そうか」とうなづいて、なかなか素晴らしい詠みぶりであるよ。手前らは、田舎者だという評判こそござろうが、詰まらない民百姓どもではござりませぬ。都の人だからといって、何とということがあろうか。皆先刻承知でござる。けつして馬鹿にはなりませんぞよ」

と言うて、もう一度、和歌を詠もうとしたが、とてもできなかったのであろうか、行つてしまつたようである。

「第四段 玉鬘、筑紫を脱出」

次男がまるめこまれたのも、とても怖く嫌な気分になって、この豊後介を催促すると、

「さてどのようにして差し上げたらいのだろうか。相談できる相手もいない。たった二人しかの弟たちは、その監に味方しないと申して仲違いしてしまつている。この監に睨まれては、ちよつとした身の動きも、思うに任せられまい。かえつて酷い目に遭つことだろう」

と、考えあぐんでいたが、姫君が人知れず思い悩んでいられるのが、とても痛々しくて、生きていたくないとまで思い沈んでいられるのが、ごもつともだと思われたので、思いきつた覚悟をめぐらして上京する。妹たちも、長年過ごしてきた縁者を捨てて、このお供して出立する。

あてきと言つた娘は、今では兵部の君と言うが、一緒になつて、夜逃げして舟に乗つたのであつた。大夫の監は、肥後国に帰つて行つて、四月二十日のころにと、日取りを決めて嫁迎えに来ようとしているうちに、こうして逃げ出したのであつた。

姉のおもとは、家族が多くなって、出立することができない。お互いに

別れを惜しんで、再会することの難しいことを思うが、長年過した土地だからと言って、格別去り難くもない。ただ、松浦の宮の前の渚と、姉おもとと別れるのが、後髪引かれる思いがして、悲しく思われるのであった。「浮き島のように思われたこの地を漕ぎ離れて行きますけれど、どこが落ち着き先ともわからない身の上ですこと」

「行く先もわからない波路に舟出して、風まかせの身の上こそ頼りないことです」

とても心細い気がして、うつ伏していらっしやうた。

「第五段 都に帰着」

「このように、逃げ出したことが、自然と人の口の端に上って知れたら、負けぬ気を起して、後を追って来るだろう」と思うと、気もそぞろになつて、早舟といって、特別の舟を用意して置いたので、その上あつらえ向きの風までが吹いたので、危ないくらい速くかけ上つた。響灘も平穩無事に通過した。

「海賊船だろうか。小さい舟が、飛ぶようにしてやって来る」

などと言う者がいる。海賊で向う見ずな乱暴者よりも、あの恐ろしい人が追つて来るのではないかと思うと、どうすることもできない気分である。

「嫌なことに胸がどきどきしてばかりいたので、それに比べれば響の灘も名前ばかりでした」

「河尻という所に、近づいた」

と言つので、少しは生きかえつた心地がする。例によつて、舟子たちが、

「唐泊から、河尻を漕ぎ行くときは」

と謡う声が、無骨ながらも、心にしみて感じられる。

豊後介がしみじみと親しみのある声で謡つて、

「とてもいとしい妻や子も忘れてしもた」

と謡つて、考えてみると、

「なるほど、舟唄のとおり、皆、家族を置いて来たのだ。どうなつたことだろうか。しっかりした役に立つと思われる家来たちは、皆連れて来てしまつた。私のことを憎いと思つて、妻子たちを放逐して、どんな目に遭わせる

だろう」と思うと、浅はかにも、後先のことも考えず、飛び出してしまつたことよ」

と、少し心が落ち着いて初めて、とんでもないことをしたことを後悔されて、気弱に泣き出してしまつた。

「胡の地の妻兒をば虚しく棄捐してしまつた」

と詠じたのを、兵部の君が聞いて、

「ほんとうに、おかしなことをしてしまつたわ。長年連れ添つてきた夫の心に、突然に背いて逃げ出したのを、どう思つていることだろう」

と、さまざまに思わずにはいられない。

「帰る所といつても、はつきりどこそこと落ち着くべき棲家もない。知り合いだといつて頼りにできる人も頭に浮ばない。ただ姫君お一人のために、長い年月住み馴れた土地を離れて、あてのない波風まかせの旅をして、何をどうしてよいのかわからない。この姫君を、どのようにして差し上げようと思つているのかしら」

と、途方に暮れているが、今さらどうすることもできない」と思つて、急いで京に入った。

第三章 玉鬘の物語 玉鬘、右近と椿市で邂逅

「第一段 岩清水八幡宮へ参詣」

九条に、昔知つていた人で残つていたのを訪ね出して、その宿を確保して、都の中とは言つても、れっきとした人々が住んでいる辺りではなく、卑しい市女や、商人などが住んでいる辺りで、気持の晴れないままに、秋に移つていくにつれて、これまでのことや今後のこと、悲しいことが多かつた。

豊後介という頼りになる者も、ちょうど水鳥が陸に上がつてつろつろしているような思いで、所在なく慣れない都の生活の何のつてもないことを思つにつけ、今さら国へ帰るのも体裁悪く、幼稚な考えから出立してしまつたことを後悔していると、従つて来た家来たちも、それぞれ縁故を頼つて逃げ去り、元の国に散りじりに歸つて行つてしまつた。

落ち着いて住むすべもないのを、母乳母は、明けても暮れても嘆いて気の毒がっているのだ、

「いやどうして。我が身には、心配いりません。姫君お一方のお身代わりとなり申して、どこへなりと行って死んでも問題ありません。自分がどんなに豪者となっても、姫君をあのよう田舎者の中に放っておき申したのでは、どのような気がしまししょうか」

と心配せぬよう慰めて、

「神仏は、しかるべき方向にお導き申しなさるでしょう。この近い所に、八幡宮と申す神は、あちらにおいても参詣し、お祈り申していらした松浦、箱崎と、同じ社です。あの国を離れ去るときも、たくさんの願をお掛け申されました。今、都に帰ってきて、このように御加護を得て無事に上洛することができましたと、早くお礼申し上げなさい」

と言つて、岩清水八幡宮に御参詣させ申し上げる。その辺の事情をよく知っている者に問い尋ねて、五師といつて、以前に亡き父親が懇意にしていた社僧で残っていたのを呼び寄せて、御参詣させ申し上げる。

「第二段 初瀬の観音へ参詣」

「次いでは、仏様の中では、初瀬に、日本でも靈驗あらたかであらうと、唐土でも評判の高いといひます。まして、わが国の中で、遠い地方といつても、長年お住みになったのだから、姫君には、なおさら御利益があるでしょう」

と言つて、出発させ申し上げる。わざと徒歩で参詣することにした。慣れないこととて、とても辛く苦しいけれど、人の言つのにしたがって、無我夢中で歩いて行かれる。

「どのような前世の罪業深い身であつたために、このような流浪の日を送るのだらう。わたしの母親が、既にお亡くなりになつていらつしやるうとも、わたしをかわいそうだと思ひになつてくださるなら、いらつしやるうところへお連れください。もし、この世に生きていらつしやるならば、お顔を

お見せください」

だ、母親が生きていらしたら」と、ばかりの途な悲しい思いを、嘆き続けていらつしやつたので、こうして今、慣れない徒歩の旅で、辛くて堪らないうちに、また改めて悲しい思いをかみしめながら、やつこのことで、椿市という所に、四日目の巳の刻ごろに、生きた心地もしないで、お着きになった。

歩くともいえないありさまで、あれこれとどうにかやつて来たが、もう一步も歩くこともできず、辛いので、どうすることもできずお休みになる。この一行の頼りとする豊後介、弓矢を持たせている者が二人、その他には下衆と童たち三、四人、女性たちはすべてで三人、壺装束姿で、樋洗童女らしい者と老婆の下衆女房とが二人ほどいた。

ひどく目立たないようにしていた。仏前に供えるお灯明など、ここで買ひ足しなどをしていよううちに日が暮れた。宿の主人の法師が、

「他の方をお泊め申そうとしていられるお部屋に、どなたがお入りになっているのですか。下女たちが、勝手なことをして」と不平を言つたのを、失礼なと思つて聞いているうちに、なるほど、その人々が来た。

「第三段 右近も初瀬へ参詣」

この一行も徒歩でのようである。身分の良い女性が二人、下人どもは、男ながら、大勢のようである。馬を四、五頭牽かせたりして、たいそうひっそりと人目に立たないようにしていたが、こざつぱりとした男性たちが従っている。

法師は、無理してもこの一行を泊まらせたく思つて、頭を掻きながらうろろしている。気の毒であるが、また一方、宿を取り替えるのも体裁が悪くめんどうだったので、人々は奥の方に入り、下衆たちは目に付かないようなところに隠して、他の人たちは片端に寄つた。幕などを間に引いていらつしやる。

この新客も気の置ける相手ではない。ひどくこつそりと目立たないようにして、互いに気を遣つていた。

それが実は、あの何年も主人を恋慕っていた右近なのであつた。年月

がたつにつれて、中途半端な女房仕えが似つかわしくなっていく身を思い悩んで、このお寺に度々参詣していたのであった。

いつもの馴れたことなので、身軽な旅支度であったが、徒歩での旅は我慢のできないほど疲れて、物に寄りかかつて臥していると、この豊後介が、隣の幕の側に近寄つて来て、お食事なのであろう、折敷を自分で持って、「これは、御主人様に差し上げてください。お膳などが整わなくて、たいそう恐れ多いことですが」

と言つのを聞くと、「自分と同じような身分の者ではあるまい」と思つて、物の間から覗くと、この男の顔、見たことのある気がする。しかし誰とも思い出せない。たいそう若かつた時を見たのだが、太つて色黒くなつて粗末な身なりをしていたので、長い年月の間を経た目では、すぐには見分けることができなかつたのであった。

「三条、お呼びです」

と呼び寄せる女を見ると、これもまた見た人なのであった。

「亡くなつたご主人に、下人であるが、長い間お仕えしていて、あの隠してお住みになつた所までお供していた者であつたよ」

と見て取ると、まるで夢のような心地である。主人と思われる方は、とても見たい気がするが、とても見えるようならいではない。困つて、「この女に尋ねよう。兵藤太と言つた人も、この男であろう。姫君がいらつしやるのかしら」

と思ひ及ぶと、とても気もそぞろになつて、この中仕切りの所にいる三条を呼ばせたが、食事に夢中になつていて、すぐには来ない。ひどく憎らしく思われるのも、せつかちというものである。

「第四段 右近、玉鬘に再会す」

やつとこつ、

「身に覚えのないことです。筑紫の国に、二十年ほど過した下衆の身を、存知の京の人がいようとは。人遣いでございませう」

と言つて、近寄つて来た。田舎者めいた搔練の上に衣などを着て、とてもたいそう太つていた。自分の年もますます思ひ知らされて、恥ずかしかつ

たが、

「もつとよく、覗いてみなさい。私を知っていませんか」

と言つて、顔を差し出した。この女は手を打つて、「あなた様でいらしたのですね。ああ、何とも嬉しいことよ。どこから参りなされたのですか。ご主人様はいらつしやいますか」

と言つて、とてもおおげさに泣く。まだ若いころを見慣れていたのを出すと、今まで過ぎてきた年月の長さが数えられて、とても感慨深いものがある。

「まずは、乳母殿はいらつしやいますか。若君は、どうおなりになりましたか。あてきと言つた人は」

と言つて、「ご主人のお身の上のことは、言ひ出さない。」

「皆さんいらつしやいます。姫君も大きくおなりです。まずは、乳母殿に、これこれと申し上げましょう」

と言つて入つて行つた。

皆、驚いて、

「夢のような心地がしますね」

「とても辛く何とも言いようのないとお思ひ申していた人に、とうとう逢えるのだから」

と言つて、この中仕切りに近寄つて来た。よそよそしく隔てていた屏風のような物を、すっかり払い除けて、何とも言葉にも出されず、お互いに泣き合う。年老いた乳母が、ほんのわずかに、

「ご主人様は、どうなさいましたか。長年、夢の中でもいらつしやるころを見たいと大願を立てましたが、都から遠い筑紫にいたために、風の便りにも噂を伝え聞くことができませんでしたのを、たいそう悲しく思つと、老いた身でこの世に生きながらえていますのも、とてもつらいのですが、お残し申された若君が、いじらしく気の毒でいらつしやつたのを、冥途の障りになろうかとお世話に困つたままで、まだ目を瞑れないであります」

と言ひ続けるので、昔のあの当時のことを、今さら言つても詮ない事よりも、答えようがなく困つたと思つが、

「いえもう、申し上げたところで詮ないことでございます。御方は、もつとくにお亡くなりになりました」

と言うなり、二、三人皆涙が込み上げてきて、とてもどうすることもできず、涙を抑えかねていた。

「第五段 右近、初瀬観音に感謝」

日が暮れてしまうと、急ぎだして、御灯明の用意を済ませて、急がせるので、かえって落ち着かない気がして別れる。「一緒にいらっしやいませんか」と言うが、お互いに供の人々が不思議に思うに違いないので、この豊後介にも事情を説明することさえしない。自分も相手も格別気を遣うこともなく、皆外へ出た。

右近は、こっそりと注意して見ると、一行の中にかわいらしい後ろ姿をして、とてもひどく身を忍んだ旅姿で、四月ころの単衣のようなものの中に着込めていらっしやる髪が、透き通って見えるのが、とてももつたいなく立派に見える。おいたわしくかわいそうにと拝する。

少し歩きなれている人は、先に御堂に着いたのであった。この姫君を介抱するのに難渋しながら、初夜の勤行のころにお上りになった。とても騒がしく、人々の参詣で混み合つて大騒ぎである。右近の部屋は仏の右側の近い間に用意してある。姫君一行の御師は、まだなじみが浅いためであるうか、西の間で遠い所だつたのを、

「もつと、こちらにいらっしやいませ」

と、探し合つて言つたので、男たちはそこに置いて、豊後介にこれしかしかじかだと説明して、こちらにお移し申し上げる。

「このように賤しい身ですが、今の大臣殿のお邸にお仕え致しておりますので、このように忍びの旅でも、無礼な扱いを受けるようなことはありませんまいと心丈夫にしております。田舎者めいた者には、このような所では、たちの良くない者どもが、侮つたりするのも、恐れ多いことです」

と言つて、話をもつとしたく思つたが、仰々しい勤行の声に紛れ、騒がしさに引き込まれて、仏を拝み申し上げる。右近は、心の中で、

「この姫君を、何とかして尋ね上げたいとお願い申して来たが、何はともあれ、こうしてお逢い申せたので、今は願いのとおり、大臣の君が、お尋ね申したいというお気持ち強いようなので、お知らせ申して、お幸せにな

りますように」

などとお祈り申し上げたのであった。

「第六段 三条、初瀬観音に祈願」

国々から、田舎の人々が大勢参詣しているのであった。大和国の守の北の方も、参詣しているのであった。たいそうな勢いなのを羨んで、この三条が言うことには、

「大慈悲の観音様には、他のことはお願い申し上げません。わが姫君様が、大式の北の方に、さもなれば、この国の受領の北の方に差し上げたく思います。わたくしめ三条らも、身分相応に出世して、お礼参りは致します」と、額に手を当てて念じている。右近は、「ひどく縁起でもないことを言うわ」と聞いて、

「とても、ひどく田舎じみてしまつたのね。頭の中將殿は、当時のご信任でさえどんなでもいらしやいました。まして、今では天下をお心のままに動かしていらっしやる大臣で、どんなにか立派なお間柄であるのに、このお方が、受領の妻として、お定まりになるものですか」

と言つと、

「お静かに。言わせて頂戴。大臣とやらの話もちよつと待つて。大式のお館の奥方様が、清水のお寺や、観世音寺に参詣なさつた時の勢いは、帝の行幸に劣つていましうか。まあ、いやなこと」

と言つて、ますます手を額から離さず、一心に拜んでいた。

筑紫の人たちは、三日間参籠しようとお心づもりしていらっしやつた。右近は、そうは思つていなかったが、このような機会に、ゆっくりお話しようと思つて、参籠する由を、大徳を呼んで言う。願文などに書いてある趣旨などは、そのような人はこまこまと承知していたので、いつものように、

「いつもの藤原の瑠璃君というお方のために奉ります。よくお祈り申し上げます。その方は、つい最近お捜し申し上げました。そのお礼参りも申し上げますよ」

と言つたのを、耳にするのも嬉しい気がする。法師は、それはとてもおめでたいことですか。怠りなくお祈り申し上げたしるしで

「ぞいます」

と言う。とても騒がしく、一晩中お勤めするのである。

「第七段 右近、主人の光る源氏について語る」

夜が明けたので、知っている大徳の坊に下がった。話を、心おきなくと
いうのである。姫君がひどく質素にしていらつしやるのを恥ずかしそう
に思つていらつしやる様子が、たいそう立派に見える。

「思いもかけない高貴な方にお仕えして、大勢の方々を見てきましたが、殿
の上様のご器量に並ぶ方はいらつしやらないと、長年拝見しておりました
が、また一方に、ご成長されてゆく姫君のご器量も、当然のことながら優
れていらつしやいます。大切にお育て申し上げなさる様子も、又となく
らいですが、このように質素にしていらつしやる姫君が、お劣りにならな
いくらいにお見えになりますのは、めつたにないお美しさであります。

大臣の君は、御父帝の御時代から、多数の女御や、后をはじめ、それよ
り以下の女は残るところなくご存知でいらしたお目には、今上帝の御母后
と申し上げた方と、この姫君のご器量とを、『美人とはこのような方をい
うのであろうかと思われる』とお口にしていらつしやいます。

拝見して比べますに、あの中の宮は存じません。姫君はおきれいでいらつ
しやいますが、まだ、お小さくて、これから先どんなにお美しくなられる
ことかと思ひやられます。

上のご器量は、やはりどなたが及びなされましようとお見えになりま
す。殿も、優れているとお思ひでいらつしやいますが、口に出しては、ど
うして数の中にお加え申されましようか。わたしと夫婦でいらつしやる
は、あなたは分不相応ですよ』と、ご冗談を申し上げていらつしやいます。

拝見すると、寿命が延びるお二方のご様子を、また他にそのような例が
いらつしやるだるうかと、思つておりましたが、どこが劣つたところがご
ざいましょうか。物には限度というものがありますから、どんなに優れて
いらつしやるうとも、頭上から光をお放ちになるようなことはありません
ただ、こういう方をこそ、お美しいと申し上げるべきでしょう。』

と、微笑んで拝見するので、老人も嬉しく思つた。

「第八段 乳母、右近に依頼」

「このようなお美しい方を、危うく辺鄙な土地に埋もれさせ申し上げて
しまふところでしたのを、もつたいなく悲しくて、家やかまどを捨てて、息
子や娘の頼りになるはずの子どもたちにも別れて、かえつて見知らない世
界のような心地がする京に上つて来ました。

あなた、早く良いようにお導きくださいまし。高い宮仕えをなさる方は、
自然と交際の便宜もございませう。父大臣のお耳に入れられて、お子様
の中に数え入れてもらえるような工夫を、お計らいになつてください。』

と言う。恥ずかしくお思ひになつて、後ろをお向きになつていらつしや
つた。『いやもう、わたしはとるにたりない身の上ですけれども、殿も御前近
くにお使いになつてくださいますので、何かの時毎に』どうおなりあそば
したことでしよう』と口に出し申し上げたのを、お心にお掛けになつて
いらして、『わたしも何とかお捜し申したいと思うが、もしお聞き出し申し
たら』と、仰せになつています。』

と言うと、

「大臣の君は、ご立派でいらつしやっても、そうしたれつきとした奥方様
たちがいらつしやると言います。まずは実の親でいらつしやる内大臣様にお
知らせ申し上げなさつてください。』

などと言うので、昔の事情などを話に出して、

「ほんとうに忘れられず悲しいこととお思ひになつて、あの方の代わりに
お育て申し上げよう。子どもも少ないのが寂しいから、自分の子を捜し出
したのだと世間の人には思わせて』と、その当時から仰せになつて
います。』

分別の足りなかつたことは、いろいろと遠慮の多かつた時なので、お尋ね
申すこともできないでいるうちに、大宰少式におなりになつたことは、お
名前でも知りました。赴任の挨拶に、殿に参られた日、ちらつと拝見しまし
たが、声をかけることができずじまいでした。

そうはいつても、姫君は、あの昔の夕顔の五条の家にお残し申されたも
のと思つていました。ああ、何ともつたいない。田舎者におなりになつて

しまつところでしたねえ」
などと、お話しながら、一日中、昔話や、念誦などして。

「第九段 右近、玉鬘一行と約束して別れる」

参詣する人々の様子が、見下ろせる所である。前方を流れる川は、初瀬川というのであった。右近は、

「一本の杉の立つている長谷寺に参詣しなかつたなら 古い川の近くで姫君にお逢いできたでしょうか」嬉しき逢瀬です
と申し上げる。

「昔のことは知りませんが、今日お逢いできた 嬉し涙でこの身まで流れてしまひそうです」

とお詠みになって、泣いていらつしやる様子、とても好感がもてる。

「器量はともこのように素晴らしく美しくいらしても、田舎人めいて、こつこつしていらつしやつたら、どんなにか玉の瑕になったことであろうに。いやもう、立派に、どうしてこのように成長されたのであろう」と、乳母殿に感謝する。

母君は、ただたいそう若々しくおつとりしていて、なよなよと、しなやかでいらした。この姫君は気品が高く、動作などもこちらが恥ずかしくなるくらいに、優雅でいらつしやる。筑紫の地を奥ゆかしく思つてみるが、皆、他の人々は田舎人めいてしまつたのも、合点が行かない。

日が暮れたので、御堂に上つて、翌日も同じように勤行してお過ごしになる。

秋風が、谷から遙かに吹き上がつてきて、とても肌寒く感じられる上に、感慨無量の人々にとつては、それからそれへと連想されて、人並みになるようなことも難しいことと沈みこんでいたが、この右近の話の中に、父内大臣のご様子、他のたいしたことのない方々が生んだご子息たちも、皆一人前になさつてゐることを聞くと、このような日陰者も頼もしく、お思ひになるのであった。

出る時にも、互いに住所を聞き交わして、もしも再び姫君の行く方が分からなくなつてしまつてはと、心配に思つのであった。右近の家は、六条

院の近辺だつたので、程遠くないので、話し合うにも便宜ができた心地がしたのであった。

第四章 光る源氏の物語 玉鬘を養女とする物語

「第一段 右近、六条院に帰参する」

右近は、大殿に参上した。このことをちらつとお耳に入れる機会もあるうかと思つて、急ぐのであった。ご門に入るや、感じが格別に広々として、退出や参上する車が多く行き来している。一人前でもない者が出入りするのも、気のひける思いがする玉の御殿である。その夜は御前にも参上しないで、思案しながら寝た。

翌日、昨夜里から参上した身分の高い女房、若い女房たちの中で、特別に右近をお召しになつたので、晴れがましい気がする。大臣も御覧になつて、どつして、里住みを長くしていたのだ。めずらしく寡婦が、うつて変わつて、若変つたようなことでもしたのでしようか。きつとおもしろいことがあつたのでしよう」

などと、例によつて、返事に困るような、冗談をおつしやる。

「お暇をいただいて、七日以上過ぎましたが、おもしろいことなどめつたにございませぬ。山路歩きしまして、懐かしい人にお逢ひいたしました」

「どのような人か」

とお尋ねになる。「こゝで申し上げるのも、まだ主人にお聞かせ申さないで、特別に申し上げるようなのを、後でお聞きになったら、自分が隠しごとを申したとお思ひになるのではないかしら」などと、思い悩んで、

「そのうちにお話申し上げましよう」

と言つて、女房たちが参上したので、中断した。

大殿油などを点灯して、うちとけて並んでいらつしやるご様子、たいそう見ごたえがあつた。女君は、二十七、八歳におなりになつたであらう、今を盛りといよいよ美しく成人されていらつしやる。少し日をおいて拝見すると、また、この間にも美しさがお加わりになつた」とお見えになる。

あの姫君をとても素晴らしい、この女君に負けなくらいだと拝見したが、思いなしか、やはりこの女君はこの上ないので、運のある方とない方とでは、違いがあるものだわ」と自然と比較される。

「第二段 右近、源氏に玉鬘との邂逅を語る」

お寝みになるつとして、右近をお足さすらせに召す。

「若い女房は、疲れると言つて嫌がるようです。やはりお互いに年配どうしは、気が合つてうまくいきますね」

とおつじやると、女房たちはひそひそと笑つ。

「そつですわ。誰が、そのようにお使い慣らされるのを、嫌がりましよう」

「やつかない」冗談をお言いかげなされるのが、煩わしいので、
などと互いに言つ。

「紫の上も、年とつた者どうしが仲よくし過ぎると、それはやはり、ご機嫌を悪くされるだろうと思つよ。そのようなこともなさそうなお心とは見えないから、危険なものです」

などと、右近に話してお笑いになる。たいそう愛嬌があつて、冗談をおつじやるところまでがお加わりになつていらつじやる。

今では朝廷にお仕えし、忙しいご様子でもないお身体なので、世の中の事に対してものんびりとしたお気持ちのままに、ただとりとめもない冗談をおつじやつて、おもしろく女房たちの気持ちをお試しになるあまりに、このような古女房をまでおからかいになる。

「あの捜し出した人というのは、どのような人か。尊い修行者と親しくして、連れて来たのか」

とお尋ねになると、

「まあ、人間の悪いことを。はかなくお亡くなりになつた夕顔の露の縁のある人を、お見つけ申したのです」

と申し上げる。

「ほんとうに、思いもかけないことであるなあ。長い年月どこにいたのか」とお尋ねになるので、真実そのままには申し上げにくいので、

「辺鄙な山里に、昔の女房も幾人かは変わらずに仕えておりましたので、そ

の当時の話を致しまして、たまらない思いが致しました」
などとお答え申した。

「よし、事情をご存知でない方の前だから」

とお隠し申しなさると、紫の上は、

「まあ、やつかいなお話ですこと。眠たいので、耳に入るはずありませんのじ」

とおつじやつて、お袖で耳をお塞ぎになつた。

「器量などは、あの昔の夕顔に劣らないだろうつか」

などとおつじやつると、

「きつと母君ほどでいらつじやるまいと存じておりましたが、格別に優れて

「成長なさつてお見えになりました」

と申し上げるのだ、

「興味あることだ。誰くらいに見えますか。この紫の君とは」

とおつじやつると、

「どうして、それほどまでは」

と申し上げるのだ、

「得意になつて思つているのだな。わたしに似ていたら、安心だ」

と、実の親のようにおつじやる。

「第三段 源氏、玉鬘を六条院へ迎える」

このように聞き初めてからは、幾度もお召しになつては、

「それでは、その人を、ここにお迎え申そう。長年、何かの折ごとに、残念にも行く方がわからなくなつたことを思い出しては、とても嬉しく聞き出しながら、今まで会わないでいるのも、つまらなことだ。

父の大臣には、どうして知らせる必要があるつか。たいそう大勢の子どもたちに大騒ぎしているようであるが、数ならぬ身で、今初めて仲間入りしたところで、かえつてつらい思いをすることであろう。わたしは、このように子どもが少ないので、思いがけない所から捜し出したとでも言つて

おこつよ。好色者たちに気をもませる種として、たいそう大切にお世話しよう」

などとうまくおつしやるので、一方では嬉しく思うもの、

「ただお心のままにごうぞ。父大臣にお知らせ申すとしても、どなたがお耳にお入れなさいましょう。むなしくお亡くなりになつた方の代わりに、何としてでもお助けあそばすことが、罪滅ぼしあそばすことになりましょう」と申し上げる。

「ひどく言いがかりをつけますね」

と、苦笑いしながら、涙ぐんでいらつしやる。

「しみじみと、感慨深い関係であつたと、長年思つていた。このように六条院に集つていらっしゃる方々の中に、あの時のように気持ちを惹かれる人はなかつたが、長生きをして、自分の愛情の変わらなさを覚えております人々が多くいる中で、言つても詮ないことになつてしまい、右近だけを形見として見ているのは、残念なことだ。忘れる時もないが、そのようにここにいらしてくれたら、たいそう長年の願いが叶う気持ちがするに違いない」

と言つて、お手紙を差し上げなされる。あの末摘花の何とも言いようもなかつたのを思い出しになると、そのように落ちぶれた境遇で育つたような人の様子が不安になつて、まずは、手紙の様子がどんなものかと思わずにはいらつしやれないのであつた。きまじめに、それにふさわしくお認めになつて、端の方に、

「このようにお便り申し上げますのを、今はご存知なくともやがて聞けばおわかりになりますよう。三島江に生えている三稜のようになつたとあなたには縁のある関係なのですから」

とあつたのであつた。

お手紙は、右近みずから持参して、おつしやる様子などを申し上げます。ご装束、女房たちの物などいろいろとある。紫の上にもご相談申し上げます。たのであろう、御匣殿などでも、用意してある品物を取り集めて、色あいや、出来具合などのよい物をと、選ばせなされたので、田舎じみた人々の目には、ひとしお目を見張るほどに思つたのであつた。

「第四段 玉鬘、源氏に和歌を返す」

「ご本人は、

「ほんの申し訳程度でも、実の親のお気持ちならば、どんなにか嬉しいであらう。どうして知らない方の所に出て行けよう」

と、ほのめかして、苦しうに悩んでいたが、とるべき態度を、右近が申し上げ教え、女房たちも、

「自然と、そのようにしてあちらで一人前の姫君となられたら、大臣の君もお聞きつけになられるでしょう。親子のご縁は、けつして切れるものではありません」

「右近が、物の数ではございませんが、ぜひともお目にかかりたいと念じておりましたのさえ、仏神のお導きがございませんでしたか。まして、どなたもどなたも無事でさえいらしたら」

と、皆がお慰め申し上げます。

「まずは、お返事を」と、無理にお書かせ申し上げます。

「とてもひどく田舎じみていますらう」

と恥ずかしくお思ひであつた。唐の紙でたいそうよい香りのを取り出して、お書かせ申し上げます。

「物の数でもないこの身はどうして 三稜のようにこの世に生まれて来たのでしょうか」

とだけ、墨付き薄く書いてある。筆跡は、かぼそげにたどしいが、上品で見苦しくないのです。ご安心なされた。

お住まいになるべき部屋をお考えになると、

「南の町には、空いている対の屋などはない。威勢も特別でいっぱい使つていらつしやるので、目立つし人目も多いことだらう。中宮のいらつしやる町は、このような人が住むのに適してのんびりしているが、そうするとそこにお仕えする女房と同じように思われるだらう」とお考えになつて、少し埋もれた感じだが、丑寅の町の西の対が、文殿になつてゐるのを、他の場所に移して」とお考えになる。

「一緒に住むことになつても、憤ましく氣立てのよいお方だから、話相手になつてよいだらう」

とお決めになつた。

「第五段 源氏、紫の上に夕顔について語る」

紫の上にも、今初めて、あの昔の話をお話し申し上げたのであった。このようお心に秘めていらしたことがあったのを、お恨み申し上げなされる。

「困ったことですね。生きている人の身の上でも、問はず語りは申したりしましうか。このような時に、隠さず申し上げるのは、他の人以上にあなたを愛しているからです」

と言つて、とてもしみじみとお思い出しになっていた。

「他人の身の上として大勢見て来たが、ほれほどにも思わなかつた中でも、女性というものの愛執の深さを多数見たり聞いたりしてきましたので、少しも浮気心はつかうまいと思つていたが、いつの間にかそうあつてはならなかつた女を多数相手にした中で、しみじみとひたすらかわいらしく思えた方では、他に例がなく思い出されます。生きていたならば、北の町におられる人と同じくらいには、世話しないことはなかつたでしょう。人の有様は、いろいろですね。才気があり趣味の深い点では劣つていたが、上品でかわいらしかつたなあ」

などとおっしゃる。

「そうは言つても、明石の方と同じようには、お扱いなさらないでしょう」

とおっしゃる。やはり、北の殿の御方を、気にさわる者とお思いであつた。姫君が、とてもかわいらしげに何心もなく聞いていらつしやるのが、いじらしいので、また一方では、「もつともなことだわ」と思い返しなされる。

「第六段 玉鬘、六条院に入る」

こういふ話は、九月のことなのであつた。お渡りになることは、どうしですらすらと事が運ぼうか。適当な童女や、若い女房たちを探させる。筑紫では、見苦しくない人々も、京から流れて下つて来た人などを、縁故をたどつて呼び集めなどして仕えさせていたのも、急に飛び出して上京なさつた騒ぎに、皆を残して来たので、また他に女房もいない。京は自然と広い所なので、市女などのような者を、たいそううまく使つては探し出して、連れて来る。誰その姫君などとは知らせなかつたのであつた。

右近の実家の五条の家に、最初こつそりとお移し申し上げて、女房たち

を選びすぐり、装束を調えたりして、十月に六条院にお移りになる。

大臣は、東の御方にお預け申し上げなされる。

「いとしいと思つていた女が、気落ちして、たよらない山里に隠れ住んでいたのだが、幼い子がいたので、長年人に知らせず捜しておりましたが、聞き出すことが出来ませんで、年頃の女性になるまで過ぎてしまつたが、思いがけない方面から、聞きつけた時には、せめてと思つて、お引き取りするのでございます」と言つて、母も亡くなつてしまつたのです。中将をお預け申し上げましたが、不都合ありませんね。同じようにお世話なさってください。山家育ちのように成長してきたので、田舎めいたことが多くございましょう。しかるべく、機会にふれて教えてやってください」

と、とても丁寧にお頼み申し上げなされる。

「なるほど、そのような人がいらつしやるのを、存じませんでしたわ。姫君がお一人いらつしやるのは寂しいので、よいことすわ」と、おおようにおっしゃる。

「その母親だつた人は、氣立てがめつたにいないまでによい人でした。あなたの氣立ても安心にお思い申しておりますので」

などとおっしゃる。

「相応しくお世話している人などと言つても、面倒がかからず、暇でありますので、嬉しいことすわ」とおっしゃる。

殿の内の女房たちは、殿の姫君とも知らないで、

「どのような女を、また捜し出して来られたのでしょうか」

「厄介な昔の女性をお集めになることすわ」と言つた。

お車を三台ほどで、お供の人々の姿などは、右近がいたので、田舎くさくないように仕立ててあつた。殿から、綾や、何やかやかとお贈りなされていた。

「第七段 源氏、玉鬘に對面する」

その夜、さつそく大臣の君がお渡りになつた。その昔、光る源氏などと

いつた評判は、始終お聞き知り申し上げていたが、長年都の生活に縁がなかつたので、それほどともお思い申しでないが、かすかな大殿油の光に、御几帳の隙間からわずかに拝見すると、ますます恐ろしいまでに思われるお美しさであるよ。

お渡りになる方の戸を、右近が掛け金を外して開けると、

「この戸口から入れる人は、特別な気がしますね」

とお笑いになって、廂の間のご座所に膝をおつきになって、

「燈火は、とても懸想人めいた心地がするな。親の顔は見たいものと聞いている。そうお思いなさらないかね」

と言つて、几帳を少し押しやりなさる。たまらなく恥ずかしいので、横を向いていらつしやる姿態など、たいそう難なく見えるので、嬉しくて、

「もう少し、明るくしてくれませんか。あまりに奥ゆかしすぎる」

とおっしゃるので、右近が、燈芯をかき立てて少し近付ける。

「遠慮のない人だね」

と少しお笑いになる。なるほど似ていると思われるお目もとの美しさである。少しも他人として隔て置くようにおっしゃらず、まことに実の親らしくして、

「長年お行く方も知らないで、心から忘れる間もなく嘆いておりましたが、こうしてお目にかかれたにつけても、夢のような心地がして、過ぎ去つた昔のことがいろいろと思ひ出されて、堪えがたくて、すらすらとお話もできないほどですね」

と言つて、お目をお拭いになる。ほんとうに悲しく思ひ出さずにはいられない。お年のほど、お数えになつて、

「親子の仲で、このように長年会わずに過ぎた例はあるまいものを。宿縁のつらいことであつたよ。今は、恥ずかしがつて、子供つばくなさるほどのお年でもあるまいから、長年のお話なども申し上げたいのだが、どうして何もおっしゃつてくださらぬのか」

とお恨みになると、申し上げることもなく、恥ずかしいので、

「幼いころに流浪するようになつてから後、何ごとも頼りなく過して来ましたが、かすかに申し上げなさるお声が、亡くなつた母にたいそうよく似て

若々しい感じであつた。微笑して、

「苦勞していらつしやつたのを、かわいそうにと、今は、わたしの他に誰が思ひましよう」

と言つて、嗜みのほどは悪くはないとお思いになる。右近に、しかるべき事柄をお命じになつて、出て行かれた。

「第八段 源氏、玉鬘の人物に満足する」

無難でいらつしやつたのを、嬉しくお思いになつて、紫の上にもご相談申し上げなさる。

「ある田舎に長年住んでいたので、どんなにおかわいそうなと見くびつていたのですが、かえつてこちらが恥ずかしくなるくらいに見えます。このよな姫君がいると、何とか世間の人々に知らせ、兵部卿宮などが、この邸の内に好意を寄せていらつしやる心を騒がしてみたいものだ。風流人たちが、たいそうまじめな顔ばかりして、ここに見えるのも、こうした話の種になる女性がいらないからである。たいそう世話を焼いてみたいものだ。知つては平気ではいられない男たちの心を見てやろう」

とおっしゃると、

「変な親ですこと。まつさきに人の心をそるようなことをお考えになるとは。よくありませんよ」

とおっしゃる。

「ほんとうにあなたをこそ、今のような気持ちだつたならば、そのように扱つて見たかつたのですがね。まつたく心ない考えをしてしまつたものだ」

と言つて、お笑いになると、顔を赤くしていらつしやる、とても若く美しい様子である。硯を引き寄せなさつて、手習いに、

「ずっと恋ひ慕つていたわが身は同じであるが、その娘はどのような縁でここに来たのであるうか、ああ、奇縁だ」

と、そのまま独り言をおっしゃるので、なるほど、深くお愛しになつた女の忘れ形見なのだろう」と御覧になる。

「第九段 玉鬘の六条院生活始まる」

中将の君にも、

「このような人を尋ね出したので、気をつけて親しく訪れなさい」

とおっしゃったので、こちらに参上なさって、

「つまらない者ですが、このような弟もいると、まずはお召しになるべきでございましてよ。お引越しの時にも、参上してお手伝い致しませんでし
たことが」

と、たいそう実直にお申し上げになるので、側で聞いているのもきまり
が悪いくらいに、事情を知っている女房たちは思う。

思う存分に数奇を凝らしたお住まいではあつたが、あきれくらい田舎
びていたのが、何とも比べようもなく思われるよ。お部屋の上つらいをは
じめとして、当世風で上品で、親、姉弟として親しくお付き合いさせてい
ただいていらつしやるご様子、容貌をはじめ、目もくらむほどに思われる
ので、今になって、三条も大式を軽々しく思うのであつた。まして、大夫
の監の鼻息や態度は、思ひ出すのも忌まましきことの上ない。

豊後介の心根を立派なものだと姫君もご理解なさりになり、右近もそう
思つて口にする。いい加減にしていたのでは不行き届きも生じるだろう
と考えて、こちら方の家司たちを任命して、しかるべき事柄を決めさせな
さる。豊後介も家司になつた。

長年田舎に沈淪していた心地には、急にすつかり変わり、どうして、仮に
も自分のような者が出入りできる縁さえないと思つていた大殿の内を、朝
な夕なに出入りし、人を従えて、事務を行う身」となることができたのは、
たいそう面目に思つた。大臣の君のお心配りが、細かに行き届いて世にま
たとなほほどでいらつしやることは、たいそうもつたない。

第五章 光る源氏の物語 末摘花の物語と和歌論

「第一段 歳末の衣配り」

年の暮に、お飾りのことや、女房たちの装束などを、高貴な夫人方と同
じようにお考えおいたが、器量はこうでも、田舎めいている点もありはし
ないか」と、山里育ちのように軽んじ想像申し上げなさつて仕立てたのを、
差し上げなざる折に、いろいろな織物を、我も我もと、技を競つて織つて
は持つて上がった細長や、小袷の、色とりどりさまざまなのを御覧にな
ると、

「たいそうたくさん織物ですね。それぞれの方々に、羨みがないように分
けてやるとよいですね」

と、紫の上にお申し上げなされると、御匣殿でお仕立て申したのも、こち
らでお仕立てさせなされたのも、みな取り出させなされた。

このような方面のことはそれは、とても上手で、世に類のない色合いや、
艶を染め出させなされたので、めつたにいない人だと思ひ申し上げになさる。
あちらこちらの擣殿から進上したいくつもの擣物を比較なさつて、濃
い紫や赤色などを、さまざまお選びになつては、いくつもの御衣櫃や、衣
箱に入れさせなさつて、年配の上臈の女房たちが伺候して、これは、あれ
は」と取り揃えて入れる。紫の上も御覧になつて、

「どれもこれも、劣り勝りの見えないものようですが、お召しになる人の
ご器量に似合うように選んで差し上げなさい。お召し物が似合わないのは、
みつともないことですから」

とおっしゃると、大臣も笑つて、

「それとなく、他の人たちのご器量を想像しようというおつもりのようです
ね。では、あなたはどれをご自分のにと思ひですか」

と申し上げなされると、

「それは鏡で見ただけでは、どうして決められましようか」
と、そうは言つたものの恥ずかしがつていらつしやる。

紅梅のたいそうくつきりと紋が浮き出た葡萄染の御小袷と、流行色のと
ても素晴らしいのは、こちらのお召し物。桜の細長に、艶のある掻練を取
り添えたのは、姫君の御料である。

浅縹の海賦の織物で、織り方は優美であるが、鮮やかな色合いでないも
のに、たいそう濃い紅の掻練を付けて、夏の御方に。

曇りなく明るくて、山吹の花の細長は、あの西の対の方に差し上げなざる

のを、紫の上は見ぬふりをして想像なさる。内大臣が、はなやかで、ああ美しいと見える一方で、優美に見えるところがないのに似たのだろう」と、お言葉どおりだと推量されるのを、顔色にはお出しにならないが、殿がご覧やいなさると、ただならぬ関心を寄せているようである。

「いや、この器量比べは、当人の腹を立てるに違いないことだ。よいものだっていつても、物の色には限りがあり、人の器量というものは、劣つていても、また一方でやはり奥底のあるものだから」

と言つて、あの末摘花の御料に、柳の織物で、由緒ある唐草模様を乱れ織りにしたのも、とても優美なので、人知れず苦笑されなさる。

梅の折枝に、蝶や、鳥が、飛び交い、唐風の白い小袷に、濃い紫の艶のあるのを重ねて、明石の御方に。衣装から想像して気品があるのを、紫の上は憎らしいと思ひになる。

空蝉の尼君に、青鈍色の織物、たいそう気の利いたのを見つけたさつて、御料にある梔子色の御衣で、聴し色なのお添えになつて、同じ元日にお召しになるようにお手紙をもれなくお回しになる。なるほど、似合つているのを見ようとお心なのであつた。

「第二段 末摘花の返歌」

すべて、お返事は並大抵ではない。お使いへの禄も、それぞれに気をつかつていたが、末摘花は、東院にいらつしやるので、もう少し違つて、一趣向あつてしかるべきなのに、几帳面でいらつしやる人柄で、定まつた形式は違えなさらず、山吹の袷で、袖口がたいそう煤けているのを、下に衣も重ねずにお与えになつた。お手紙には、とても香ばしい陸奥国紙で、少し古くなつて厚く黄ばんでいる紙に、

「どうも、戴くのは、かえつて恨めしゅうございまして。着てみると恨めしく思われます、この唐衣は お返ししましよ、涙で袖を濡らして」

ご筆跡は、特に古風であつた。たいそう微笑を浮かべなつて、直ぐには手放しなならないので、紫の上は、どうしたのかしらと覗き込みなつた。お使いに取らせた物が、とてもみすぼらしく体裁が悪いと思ひになつて、ご機嫌が悪かつたので、御前をこつそり退出した。ひどく、ささやき

合つて笑つのであつた。このようにむやみに古風に体裁の悪いところがありになる振る舞いに、手を焼くのだと思ひになる。気恥ずかしくなる目もとである。

「第三段 源氏の和歌論」

「昔風の歌詠みは『唐衣』、『袂濡る』といった恨み言が抜けないですね。自分も、同じですが。まったく一つの型に凝り固まつて、当世風の詠み方に変えなさらないので、ご立派と言えばご立派なものです。人々が集まつている中にいることを、何かの折ふしに、御前などにおける特別の歌を詠む時には、『まとゑ』が欠かせぬ三文字なのです。昔の恋のやりとりは、『あだ人』という五文字を、休め所の第三句に置いて、言葉の続き具合が落ち着くような感じがするようです」

「さまざまな草子や、歌枕に、よく精通し読み尽くして、その中の言葉を取り出しても、詠み馴れた型は、たいして変わらないだろう。常陸の親王がお書き残しになつた紙屋紙の草子を、読んでみなさいと贈つてよこしたことがあります。和歌の規則がたいそうびつしりとあつて、歌の病として避けるべきところが多く書いてあつたので、もともと苦手としたことで、ますますかえつて身動きがとれなく思えたので、わずらわしくて返してしまつた。よく内容をご存知の方の詠みぶりとしては、ありふれた歌ですな」

とおつしやつて、おもしろがつていらつしやる様子、お気の毒なことである。上は、たいそう真面目になつて、

「どうして、お返しになつたのですか。書き写して、姫君にもお見せなさるべきでしたのに。私の手もとにも、何かの中にあつたのも、虫がみな食つてしまいましたので。まだ見てない人は、やはり特に心得が足りないのです」とおつしやる。

「姫君のお勉強には、必要がないでしょう。総じて女性は、何か好きなものを見つけてそれに凝つてしまうことは、体裁のよいものではありません。どのようなことにも、不調法というのを感じしないものです。ただ自分の考

えだけは、ふらふらさせずに持っていて、おだやかに振る舞うのが、見た目にも無難というものです」

などとおっしゃって、返歌をしようとはまったくお考えでないのだから、返してしまおう、とあるふうなのに、「こちらからお返歌なさらないのも、礼儀に外れていましゅう」

と、お勧め申し上げなさる。思いやりのあるお心なので、お書きになる。とても気安いふうである。

「お返ししましゅうとおっしゃるにつけても 独り寝のあなたをお察しいたします ごもつともですな」
とあつたようである。